

C 五郎沼と嶋の堂千手観音

五郎沼の歴史と自然

C④ 経塚とは

経塚とは、経典を紙に写したものを筒に入れ、銅製や陶製などの経筒や経箱に入れ、さらに焼物の壺などの外容器に入れて地面に埋め、盛土をした塚である。経典を埋納した背景には、末法思想が深く関係している。

大乘仏教の歴史観では、釈迦の入滅後を「正法」、「像法」、「末法」の三時期に区分し、末法の時代は釈迦の教えだけが残りの、その教えを実践する人がいなくなるため、乱れた世の中になると考えられていた。そこで、当時の仏教徒は、釈迦の入滅後 56 億 7 千万年後に釈迦の再来として地上に降りて衆生を救ってくれるという弥勒菩薩に備え、仏典を経筒に入れ地中に埋納して残そうとした。これが、経塚の始まりであるとされている。

釈迦の入滅およびそれ以後の正法・像法・末法の年数については異説があるが、紀元前 943 年とする説をもとに永承 7 年（1052）が末法元年とされた。

経典の種類は法華経が最も多く、経典は紙を用いた紙本経が一般的であるが、瓦・銅板・貝殻なども使用された。埋経の方法は、法華経などの教典を紙に書いて経筒（銅製・石製・陶製などの経筒とこれを保護する甕などの外容器）に納める。経筒には、発願者の氏名・目的・紀年などが銘記されている例もあり、造営の願意を具体的に知ることができる。

副納品として、銅鏡、刀子、合子、銭貨、仏具などが確認されている。これらの経塚は、主に地域の核となる重要な寺社の境内や、霊地・聖地とされる山頂や丘陵上またはそれらの南・東斜面に築かれることが多かった。

末法思想は、経塚以外にも影響を与えた。平安時代末期に自然災害・戦乱が続発し、源平の争乱から鎌倉幕府への転換はそのような乱世の表れと捉えられ、末法が現実味を帯びて終末論的な思想として受け止められるようになった。さらに末法では、現世における救済の可能性が否定されることから、死後の極楽浄土への往生を求める風潮が高まり、浄土信仰が広まることとなる。

念仏によって極楽往生を願う浄土信仰のもとに、貴族層は極楽浄土に往生することを願い、阿弥陀仏に救いを求め、競うように極楽浄土を具現する華麗な阿弥陀堂を建立した。中尊寺金色堂もその例外ではない。

このような末法の世に、阿弥陀仏の名を唱える（称名）^{しょうみょう}によって極楽往生を願う浄土信仰は、浄土宗（法然）、浄土真宗（親鸞）、時宗（一遍）という宗派を生み出すなど、浄土教の興隆や鎌倉新仏教の成立にも大きな影響を与えた。経塚の造営はやがて極楽往生、

現世利益などの祈願に変わり、当初の経典保存の主眼が忘れられることとなる。